

令和3年度 地区小・中学校教育課程研究会 提案資料

部会名 生活科

神奈川県小・中学校教育課程研究会研究主題

- ①カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実
(含む社会に開かれた教育課程の実現)
- ②資質・能力の育成のための学習評価の充実
(指導と評価の一体化)
- ③主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善
- ④個々の子どもの困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫
(【総則4の部分】子どもの発達の支援)

テーマ

気付きの質を高め自ら学び思いや考えを伝え合う子の育成
～具体的な活動や体験を通して「伝えたい」という意欲を高めるための授業実践～

地区名 県央地区
所属校 座間市立立野台小学校
氏名 佐藤 恵

※児童の写真、ワークシート等の記述及び作品等については、すべて提案資料への掲載の許諾を得ています。

Ⅰ はじめに

令和2年度県央地区小・中学校教育課程研究会では、「具体的な活動や体験を通して気付きの質を高める学習活動を充実し、生活科学習の特質を活かした学習指導と評価の工夫・改善」を主題として設定した。

また、趣旨として、「児童一人ひとりの思いや願いを大切にし、身近な環境への気付きを意識した活動から自分自身の気付きなどに広げ、表現を通して深めていく指導が必要である。そのための指導計画、教材、学習指導と評価等の在り方について研究する。」とあり、主に以下の3点について具体的に研究することが挙げられた。

- ① 幼児教育との連携や他教科・領域との関連を踏まえた年間指導計画及び評価計画の作成
- ② 一人ひとりの児童自身の気付きの質を高め、活動や体験を一層充実するための授業展開の工夫・改善
- ③ 評価の視点を明確にし、子供の姿を適切に見取り、指導に生かす評価の工夫・改善

また、神奈川県小・中学校教育課程研究会研究主題（平成29年3月改訂学習指導要領版）としては、

- ① カリキュラム・マネジメントによる学校教育の改善・充実
(含む社会に開かれた教育課程の実現)
- ② 資質・能力の育成のための学習評価の充実（指導と評価の一体化）
- ③ 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善
- ④ 個々の子どもの困難さに応じた指導内容の指導方法の工夫
【総則4の部分】子どもの発達の支援

の4つが挙げられており、本研究では③を中心に研究を進めた。

1. テーマ

気付きの質を高め自ら学び思いや考えを伝え合う子の育成

～具体的な活動や体験を通して「伝えたい」という意欲を高めるための授業実践～

2. テーマ設定の理由

令和2年度は、新型コロナウイルスという学校現場にとって未曾有の危機に見舞われた。3月から5月末まで全国一斉休校となり、教育課程自体の見直し、新型コロナウイルスに対応した学校生活習慣の見直し、感染症対策など、教職員、児童にとっても変化の著しい年となった。

1年生の児童は、休校期間、分散登校を経て、2学期の半ば頃にようやく小学校生活に慣れ、友達同士の関わりも少しずつ見えるようになってきた。当番活動や係活動など積極的に行う児童が多く、協力して行うことができるようになってきたが、休み時間には、特定の友達と遊ぶことが多い。また、相手の気持ちが想像できず、強い言葉を言ってしまっ

たり、意見がぶつかったりするトラブルも多かった。学習では、ペアや小グループでの活動は活発に行うことができるが、全体の場で発言することを怖がったり、声が小さくなったりして、自信をもって発言することができる児童が少ないのが実態であった。それは、本学級の児童だけではなく、本校全体の児童の課題でもあり、校内研究でも「表現力の向上」に重点的に取り組んでいる。研究を進めている中で、本校の児童は、意見があっても全体に表現したり、見通しをもって自分自身で問題を解決したりすることに課題がみられることが分かってきた。

そこで、生活科でも本校の児童の課題である「表現力」に着目した。具体的な活動や体験をするなかで、児童に見通しを持たせ、様々な表現方法を提示したり、相手意識をもたせたりすることで、気づきの質や「伝えたい」という意欲を高めることができるのではないかと考えた。

II 研究内容

1. 研究仮説

具体的な活動や体験をする中で、相手意識や目的意識を明確に示したり見通しをもたせたりすることで気づきの質を高め、自ら「伝えたい」という意欲の向上につながるのではないか。



2. 研究構想図

【学校教育目標】

自ら学び たくましく生きる 心豊かな児童の育成 ～意欲・笑顔・思いやり～

【小学校 生活科教科目標】

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにするための資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

- (1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わりに気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に着けるようにする。
- (2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- (3) 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

【立野台小学校校内研究テーマ】

「共に考え、豊かに表現する子の育成～思いを明確に伝える表現の工夫～」

【児童の実態】

- ・ペアや小グループでは発言できるが、全体での発表を怖がったり、恥ずかしがったりする児童が多い。
- ・自分の気持ちをうまく伝えられず、トラブルになる。

【研究テーマ】

気付きの質を高め自ら学び
思いや考えを伝え合う子の育成
～具体的な活動や体験を通して「伝えたい」
という意欲を高めるための授業実践～

【研究仮説】

具体的な活動や体験をする中で、相手意識や目的意識を明確に示したり見通しをもたせたりすることで気付きの質を高め、自ら「伝えたい」という意欲の向上につながるのではないかと。

【教師の願い】

- ・相手の気持ちを考えながら、意見を伝えられるようになってほしい。
- ・自らの気付きを自覚し、様々な方法で自信をもって表現できるようになってほしい。

【手立て】

①相手意識の明確化・表現の場の工夫

- ・「家族→クラスの友達→他クラスの友達→外部の年長児」と対象を徐々に広げていく。

③見通し表の掲示

- ・単元計画の掲示

②活動のネーミング化

- ・児童と一緒に考えた活動名

④振り返り活動の充実

- ・継続的な振り返り
- ・動画撮影

3. 研究の流れ(具体的な手立て)

まずは、合科的・関連的な指導と家庭学習とのつながりを生かせるように、例年以上に他教科・行事との関連を図ることで、2年間を見通したカリキュラム・マネジメントを行った。具体的な手立てと関連付けて見直すことで、重点指導項目を挙げていった。地域との交流も、始めほどの程度できるか不透明な中、できるだけ具体的な活動や体験活動の導入、表現の場の設定など見通しをもった取り組みができるように検討を行った。

◆ 2年間を見通したカリキュラム・マネジメント

学年	時	生活科の単元	具体的・体験的活動	目的意識・相手意識 表現の場	他教科・行事などとの関連
1 年 生	6月	がっこうだいすき	6年生との学校探検 タブレット学習	家族に発表する	国：「どうぞよろしく」 「こんなものみつけたよ」 道：「みんなでたのしく」 「げんきにあいさつ」
	7月	きれいにさいてね	アサガオを育てて、観察	クラスの友達に発表	道：「みんなみんないきている」 国：「ききたいな、ともだちのはなし」
	9月	いきものとなかよし	校外学習 虫かご・虫取り網の設置 関連図書設置	クラスの友達に発表	国：「くちばし」
	10月	じぶんでできるよ	家庭での実践 児童への振り返り・保護者への振り返り	他クラスとの交流	道：「ちゃんとのたつじん」
	11月	たのしいあきいっぱい	校外学習 「あきまつり」グループ活動 工作活動	家族	道：「もみじがり」
12月～	もうすぐ2ねんせい	幼稚園・保育園への依頼作成 ビデオ発表形式	幼稚園・保育園との交流 年長児童	国：「てがみでしらせよう」 「いいこといっぱい1ねんせい」 行：「6年生を送る会」 道：「もうすぐ二ねんせい」	

学年	時	生活科の単元	具体的・体験的活動	目的意識・相手意識 表現の場	他教科・行事などとの関連
2 年 生	4月	春だ今日から2年生	「学校探検」の計画	新1年生	行：「1年生を迎える会」 道：「学校大すき」「学校たんけん」 国：「かんさつ名人になろう」
		ぐんぐんそだてわたしの野さい	野菜を育てる	クラスの友達	
		どきどきわくわくまちたんけん	郊外学習	家族	
		生きものとなかよし大作せん	虫かご・虫取り網の設置 関連図書設置	クラスの友達	国：「夏がいっぱい」
		うごくうごくわたしのおもちゃ	おもちゃ作り	1年生 他クラス	国：「おもちゃの作り方をせつめいしよう」
		つながるひろがるわたしの生活	家庭での実践	クラスの友達 家族	道：「わたしたちも仕事をしたい」 道：「わたしのおじいさん、おばあさん」
		あしたへジャンプ	思い出すごろくづくり アルバム制作	クラスの友達 家族	国：「楽しかったよ、2年生」 道：「わたしのものがたり」

①相手意識の明確化・表現の場の工夫

「がっこうだいすき」の学校探検では、6年生の児童の協力を得てスタンプラリー形式で校内を回り、自分が見てきたことをワークシートに記し、まだ学校をよく知らない家族に発表する活動を行った。その過程で、タブレットを使用し自分が気になった箇所を撮影し写真を見ながらワークシートに絵を描く活動を行った。また、6年生との交流の中から、お兄さんお姉さんに教えてもらえて嬉しい、また関わりたいという意欲が生まれ、休み時間に交流する姿も見られた。学校探検と同時に、小学校の中で働く先生方についても知れるようにした。直接会うことができる先生には、探検の時にお話を聞いたり、他学年の先生や調理員さん、用務員さんにも協力を得て写真を撮影し、地図とともに掲示したりすることで、どんな先生が学校で働いているかいつでも確認できるようにした。

「じぶんでできるよ」の単元では、お手伝いという形ではなく、自分も家族の一員として動くことができるようにカードを作って、毎日取り組めるようにした。題名も「かぞくにこにこだいさくせん」として、お家の人が笑顔になれるように作戦を立てることにした。保護者の協力もいただき、定期的に児童が振り返る機会をもった。さらに保護者に対して児童の取り組みの様子や、保護者の気持ちもどうか、その都度、

児童に返すようにした。この単元は一時的な取り組みではなく、継続して取り組むことをねらい、単元計画を入れ替えた。

「たのしいあきいっぱい」の単元では、見つけた秋のものを使って、「あきまつり」を開催することを計画した。クラス内の活動だけに終わらせず、クラス相互で招待し合うことで、新しい友達との交流や自分たちにはないアイデアを共有し、新しい繋がり、新しい遊びの発見に繋がることもねらい取り組んだ。また、秋のものを見つけるために近くの公園に「あきみつけ」に出掛けた。自分がやりたい出店で、どんなものがあろうか計画を立てておき、「あきまつり」に使う材料を見つけるという目的意識をもって出かけることで、児童は意欲的に木の実や葉っぱを探していた。

単元の中で、発表の場を設けることを常に考えた。まずは、身近な家族、クラスの友達、他のクラスの友達、外部の保育園、幼稚園の先生や年長児に対してと少しずつ、伝える相手を広げていった。相手がいることでより分かりやすく伝えるにはどうしたらよいかを考えさせ、ワークシートに記した絵を示しながら発表したり、作成したおもちゃやゲームのやり方について実物を使って言葉で説明したりする場面を設けることで、徐々に児童自身が必要感をもって発表できるように工夫した。



セリフのマニュアル化

「がっこうだいすき」の単元では、お家の人に伝える活動の際、セリフをある程度決めて練習を行った。そうすることで、安心して話すことができるように配慮した。

め おうちのひとにわかりやすくつたえよう。

「(ぼく・わたし)は、がっこうたんけんをしました。いちばん、きになったばしょをしようかします。

(プリントのえをみせながら、せつめいする)

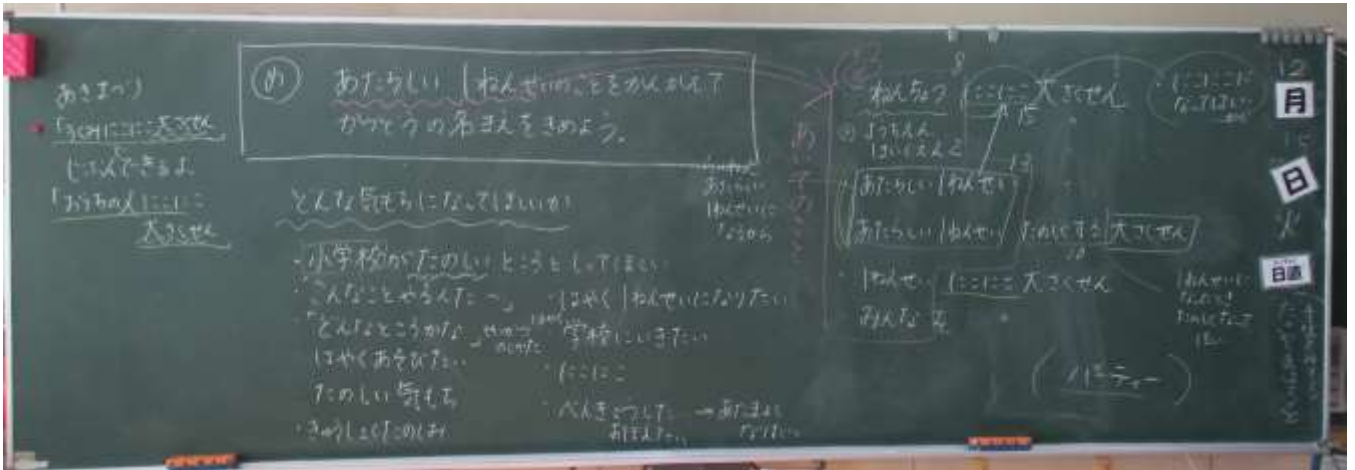
ここは、○○室です。□□がありました。△△と思いました。

きいてくれて、ありがとうございました。」

★おうちのひとから、メッセージをかいてもらおう。

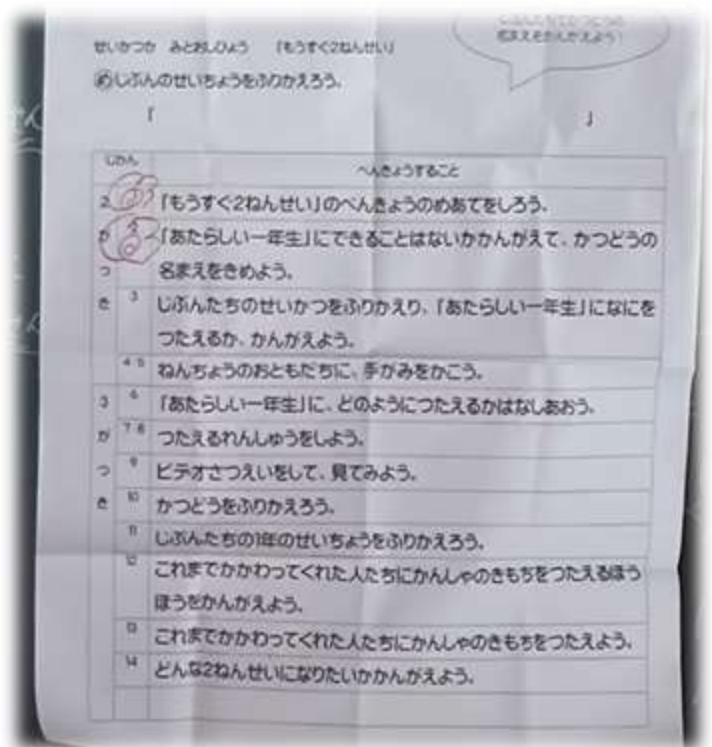
②活動のネーミング化

児童が活動に目的意識を持てるように、また、児童自身が楽しんで活動できるように、単元の目標に合わせて活動に名前をつけた。例えば、「かぞくにこにこだいさくせん」「あきまつり」「〇くみ、こにこだいさくせん」などである。はじめは、教師主導で名前を付けていったが、徐々に児童から「こんな名前をつけたらどうか」「相手を楽しませたいな」などの発言が出てくるようになった。



③見通し表の掲示

単元ごとに、どのような流れで活動を行うのか見通しを持つことができるように「〇〇がくしゅうのみとおしひょう」を掲示した。活動のゴールを見える化することで、児童も目的意識をもって学習を進めるようにした。

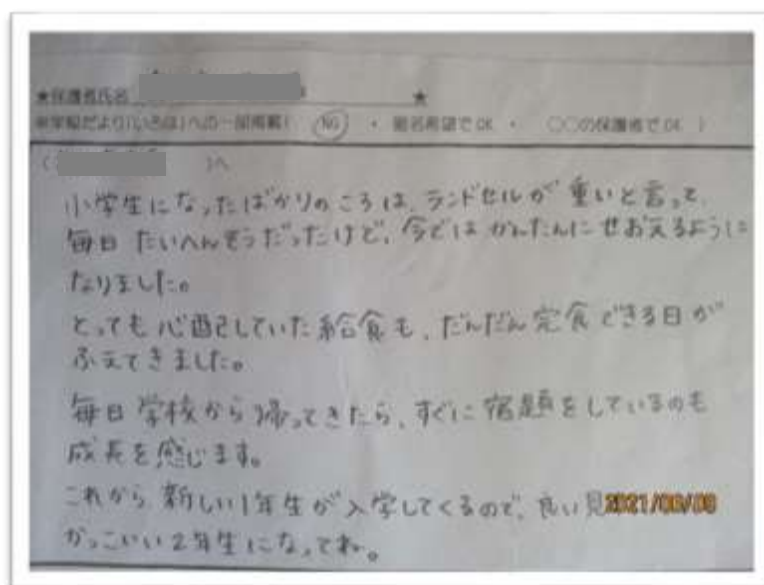


④振り返り活動の充実

活動が終わった後には、振り返りカードを書くようにした。「じぶんでできるよ」の單元では、家庭での実践を2週間程度行った後、自分が決めた実践内容の振り返りと見直しを行い、取り組みを改善する場合とそのまま継続する場合とを見童に選択できるようにした。また、家庭での実践だったため保護者に感想を募り、その内容を子どもに伝えたり、学級便りで紹介したりした。

また、動画撮影による記録の保存と振り返りも行った。「もう

すぐ2ねんせい」の單元では、幼稚園・保育園の先生へ依頼文と共に、年長児へ小学校生活を介绍するDVDを贈った。自分たちが経験してきた小学校1年生の生活を伝えるために、映像を撮影し、卒園した幼稚園・保育園に送るという活動の一環である。その過程で、自分たちができるようになったこと、支えてくれている人たちがいることを確認することができた。映像を撮影することで、自分を客観的に見つめ、より相手に伝わるにはどうしたらいいかを見直す方法の一つとした。また、動画を保存することで、教師の評価にも活かすようにした。



↑「もうすぐ2年生」が終わってからの保護者から子どもに向けたのメッセージ



4. 授業実践

生活科学学習指導案

指導者 佐藤 恵

1. 日時 令和3年1月20日（水） 第2校時（9：35～10：20）
2. 学年・組・場所 第1学年4組（27名）教室
3. 単元名 もうすぐ2ねんせい

4. 単元について

（1）学習指導要領の指導事項から本単元は、小学校指導要領内容（8）

自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々とかかわることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。

をもとに構成する。

本単元は、入学してからの1年間を振り返り、年長児との関わりを深める活動を設定していく。その中で、「目的意識や相手意識を持ち、より相手に分かりやすく伝える」ということに焦点をあて、単元を通して重点的に指導の工夫、改善をしていきたい。

本来であれば、年長児を小学校に招き、学校を案内したり一緒に遊んだりしながら交流を深める活動を行っていきたいが、昨今の状況や感染症対策も考慮し、小学校の生活について動画撮影をし、それを幼稚園・保育園の年長児に見てもらおう計画を設定した。年長児の気持ちを考え、友達同士で話し合ったり撮影した動画を見返したりしながら、相手に分かりやすく伝えるにはどうしたらよいかを考えさせるようにしていく。その際、表現する手段として言葉や絵、動作、劇化などの方法を提示する。その関わりの中で、自分だけではなく他者の気付きと比べたりすることで気付きの質を高め、自ら「伝えたい」という意欲の向上を図ることをねらいとしている。

（2）児童観

本学級の児童は、4・5月にあった一斉休校が明け、全体的に小学校生活に慣れ始めたのは2学期に入ってからである。明るく元気な児童が多く、徐々に多くの友達と関わる姿が見られるようになってきた。何事にも一生懸命取り組み、係活動や当番活動など友達と協力して積極的に頑張ることができる。

一方で、自分本位な考えを相手に押し付けてしまったり、相手の気持ちを想像する力が不足して強い言葉を言ってしまうたり等のトラブルになることがある。また、学習の中では全体の中で意見を言うことに抵抗があったり、指名されたときに口籠

ってしまったりする児童も見られる。そこで生活科の学習で、家族や学校の友達、地域の年長児との交流を通して、身近な人々と関わることの楽しさを知り、相手に分かりやすく伝えることの大切さに気付いてほしいと考えている。

(3) 指導観

本単元では児童の実態から、具体的な活動や体験をする中で、「相手を意識」した活動を多く取り入れ、表現の場を多く設定することにした。本来なら学校に地域の保育園や幼稚園の園児を招き、小学校生活についての紹介や遊びを通して交流を深めていく活動をしていきたい。しかし、今回は感染症対策として、保育園・幼稚園側に協力を得て、小学校の生活を年長児に紹介する活動をビデオに撮影し、園児に映像を見てもらうことにした。

まずは、「目的意識・相手意識」をもたせるために、「〇〇だいさくせん」という活動のネーミングを行った。こうすることで、自分たちでも『「〇〇だいさくせん」の準備をしよう』と取り組みやすくしたり、教師側もいつでも目的に立ち戻らせたりすることができるのではないかと考える。

次に、「活動の見通し」をもたせるために、「見通し表」を掲示し、今どこまで活動が進んでいるかを視覚で分かるようにした。うまくいかなかったときや、時間が足りないときは、前時に戻ったり活動を増やしたり、児童自身で判断できるように促していきたい。

さらに、「振り返り」の時間を多く設定し、自分の伝え方を見直したり友達の良さに気付いたりすることができるようにする。今回は、発表の際にタブレットを使用し、撮影した自分達の姿を見返すことで、よりわかりやすい伝え方や、工夫点などについて気付きの幅が広がるのではないかと考えた。また、映像に残していくことで、教師が評価する際の資料とすることもできる。これは、指導と評価の一体化につながると考えた。クラス内だけにとどまらず、他クラスとも交流し、伝える内容や伝え方についてお互いに共有し、新たな気付きが生まれるようにしていきたい。

5. 単元目標

自分たちの生活について、身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかかわることの楽しさが分かり、進んで交流することができるようにする。

6. 単元の評価規準

	評価規準
知識・技能	自分たちの生活や出来事を身近な人々と伝え合う活動について、相手や目的に応じた伝え方が分かり、互いに交流することの良さや楽しさに気付いている。
思考・判断・表現	自分たちの生活や出来事を身近な人々と伝え合う活動について、自分なりに考え、工夫したり、振り返ったりしながら自分の気持ちを伝えている。

主体的に学習に取り組む態度	自分たちの生活や出来事を身近な人々と伝え合うことに感心をもち、進んで交流しようとしている。
---------------	---

7. 単元指導・評価計画（14時間扱い・本時6時間目）

○…記録に残す評価 ・…指導に生かす評価

次	時	学習内容	知	思	主
1	1	1年生を振り返り、お世話になった人や新1年生に向けてできることはないか考える。		・	
2	2	自分たちが、新1年生に向けてできることの活動名を決め、計画を立てる。			・
	3	自分たちの生活を振り返り、伝える内容を決める。(全体)		○	
	4・5	年長児の気持ちを想像しながら、活動の内容を伝える方法を考える。	○	・	
	6 本時	「新しい1年生」に分かりやすく伝える方法を、グループで話し合う。 →国語：「てがみでしらせよう」		○	
	7 8	グループで伝える練習をする。	○	・	
	9 10	ビデオ撮影をする。		○	
	11	撮影した映像を振り返り、相互評価を行う。		・	○
	12	自分のグループの動画の見直しを行う。		○	
3	13	年長からの感想を聞いて自分たちの活動の振り返りをおこなう。			○
	14	自分たちの1年の成長を振り返り2年生への期待感をもつ。		・	

8. 本時の指導（6／14）

(1) 本時の目標

新しい1年生の気持ちについて考え、それぞれの内容をどのように伝えるか考えている。

(2) 本時の評価規準

	十分満足できる (A)	おおむね満足できる (B)	努力を要する (C) と判断した児童への具体的な手立て
思考・判断・表現	新しい1年生の気持ちについて考え、それぞれの内容をどのように伝えるか具体的に考えている。	新しい1年生の気持ちについて考え、それぞれの内容をどのように伝えるか考えている。	自分の入学前の気持ちを思い出させ、何を一番に伝えたいか個別に声をかけ、気持ちの確認を行う。

(3) 展開

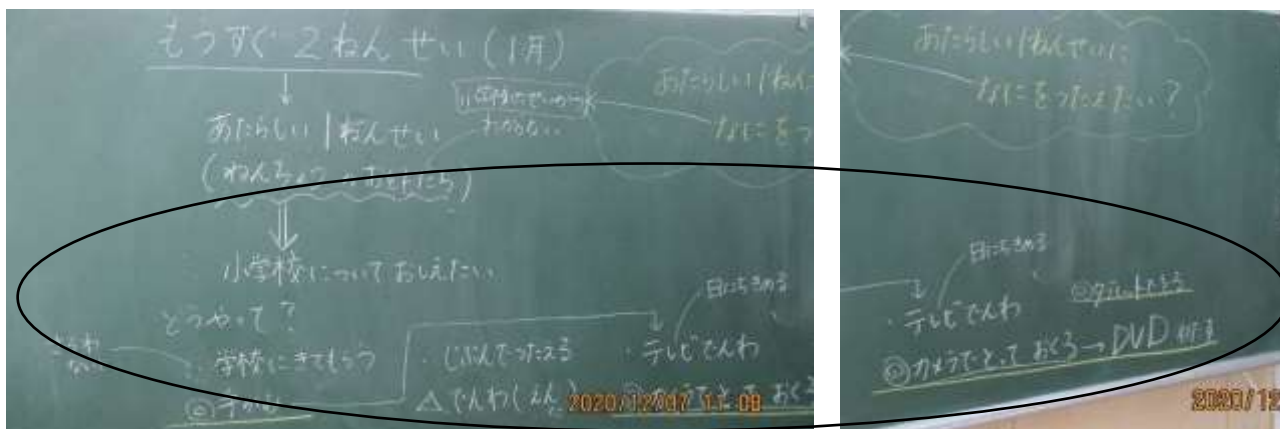
	学習活動	指導上の留意点	評価
導入	1. 年長児へ伝える内容を確認する。	・見通し表を見て学習の流れを確認する。	
	「あたらしい1ねんせいニコニコ大きくせん」 つたえるばめんとせつめいのしかたをかんがえよう。		
展開	2. 自分たちが考えた年長児の気持ちを確認する。 3. 説明の仕方について知る。 4. 動画にしたい場面と、その説明の仕方を考える。 5. 全体で共有する。	・作戦名に込めた気持ちの確認を行う。 ・園児に小学校の生活が分かるように発表することを押さえ、その説明の仕方を考えるよう伝える。 ・動画に撮影した場面をグループで話し合い、その後、説明を個人で考えるよう指示する。 ・全体で共有することで、自分たちのグループの参考にしたり、改善したりできるようにする。	思新しい1年生の気持ちについて考え、それぞれの内容をどのように伝えるか考えている。(発言・ワークシート)
まとめ	6. 次時の確認をする。	・次回はより具体的な内容を話し合うことを確認する。	

5. 学習活動と児童の変容

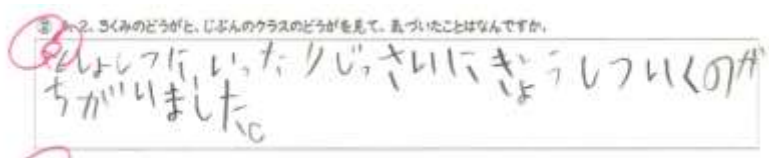
(1) 「知識・技能」の見取り

2時間目の年長児にできることはないか考える時間では、前単元で行った「あきまつり」でクラス交流の中でゲームを考えたり説明したりする活動を行っていたため、小学校に招待したいと、直接交流したいという意見がたくさん出た。昨今の状況を考えて、全員を招待することは難しいということを知らせると、A児からは、動画のやりとりはどうかという意見が出た。「コロナウイルスでも、自分たちの小学校の生活をビデオで撮影してお知らせすれば新しい1年生が楽しみになると思う。」と相手の気持ちを考えた発言が認められた。

↓児童の発言をまとめた板書



今回の活動は、クラスごとに動画を撮影したため、クラスによって伝える内容が少し異なっていた。初めは、自分のクラスの動画をみて振り返りを行ったが、他クラスの動画を見せて感想交流を行うことで、さらに気付きの幅が広がるのではないかと考えた。「キラキラポイント」として、発表の仕方（声の大きさ、読む速さ、はきはきと）の他に、伝える方法について、自分のクラスと同じところ、違うところ、を探した。B児は「3組は、実際に図書室を見せたところが、(4組と)ちがう。」と気づき、C児は、自分のクラスの動画を見てくれた感想を発表した後、「(学校で飼育している)かめとうさぎを本当に見せていてびっくりした。すてきなお手紙ありがとう。」など、自分のクラスの内容の違いに気づき、さらにクラス間の交流を楽しんでいる様子が見受けられた[佐藤1]。



↑ B児の振り返りカード

↓ C児の振り返りカード



(2) 「思考・判断・表現」の見取り

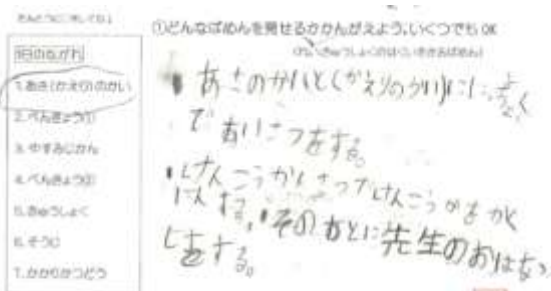
クラスの動画を撮影した後、さらに自分たちの動画をパワーアップできないか考える振り返りの時間を設けた。D児の居るグループは、算数ブロックの使い方を教えたいということで、「3+5」のやり方を例示することに決めたが、なかなかうまく説明できずに悩んでいた。相談する中で、「実際にブロックを動かしながら、説明するのはどうか。その方が分かりやすいのではないか。」という意見があり、実際にブロックを動かしながらどうすれば分かりやすく伝えられるか考えていた。振り返りを行った後、自分たちに足りないのは、身振りや手ぶりであると気付き、再撮影の時に気付きを活かして発表する姿が見られた。



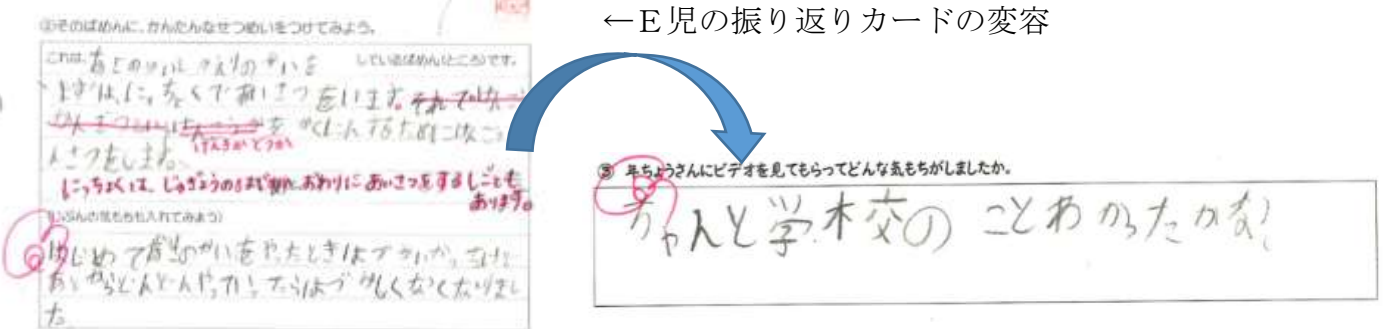
D児の振り返りカード→

(3) 「主体的に学習に取り組む態度」の見取り

グループ決めを行う際には、小学校のどんな所を紹介したいかアンケートを取った。E児は、日直の仕事について説明することを希望していた。グループの話し合いの中で、日直の仕事はどんなものがあるか順を追って説明し、流れを説明していた。日直を行った経験を振り返りながら自分の感想を書くことができていた。さらに、動画を撮影する際には、友達に対して「もっとはきはき言うと良いよ。」などのアドバイスをしながら練習する姿も見られた。さらに、年長児に動画を見てもらった時には、「ちゃんと学校のことがわかったかな。」と、しっかり相手意識をもち、「分かりやすく伝える」という目的を考えて振り返りを行っていた。



←E児の振り返りカードの変容



III 研究の成果

① 相手意識の明確化・表現の場の工夫

○身近な家族から始まり、クラスの友達、他クラスの友達、外部の年長児と表現する相手を広げてきたことで、児童は少しずつ自信をもって発表することができるようになってきた。単元に入る前に、前時に発表した相手を確認することで、教師が主体で「伝える」相手の設定を行っていたが、次は「もっとこうしたい。」「こんなことはできないかな。」など、児童が自分たちでアイデアを出すことができるようになり、意欲の高まりを感じた。

②活動のネーミング化 ③見通し表の掲示

○活動のネーミング化や見通し表の掲示を継続的に行っていくことで、「次の活動は○時間目だね。」「名前は、どうする?」「前は、3組にここにこだわったけど、今度は年長さんだから、新しい1年生にここに大作戦がいいと思う。」など、児童主体で活動する様子が見られた。児童主体の活動の中で、どうしても目的を見失いそうになるが、「だれに、何を伝えるか。」「何のために伝えるか。」をすぐに確認することができ、軌道修正しやすいと感じた。

●初めに見通し表を掲示することで、全体の流れを把握することができるが、児童の様子によっては、流れが変わったり時間を増やしたりすることも考えられる。時間数に限りはあるが、児童の取り組み状況によっては、時間を増やしたり前時に戻ったり、柔軟に対応する必要があった。

④振り返り活動の充実

○コロナの状況下で交流することの難しさがあったが、逆に、交流の必要性・重要性を非常に強く感じた。今回の研究では、外部の幼稚園・保育園に協力を要請し直接交流ではなく、動画による間接的な交流になってしまったが、記録に残すことでいつでも、何度でも振り返ることができるという利点も感じた。また、撮影した動画をすぐに見て、「撮り直したい」「つなげたい」「テロップを入れたい」など児童の意欲の高まりを感じた。振り返りのしやすさも利点である。

○自分のクラスの動画の振り返りだけではなく、他クラスの動画を見ることで自分たちにはないアイデアや表現の仕方、伝え方などの違いに気付くことができた。

●動画による振り返りでは、何度も見直すことができる反面、同じ映像を見ていると、見慣れてしまい飽きてくることもあった。また、教師は動画の編集にかなり時間を要したので、今後検討していく必要があると考える。



IV 今後の課題

1. 具体的・体験的な活動の工夫

昨今の状況を見て、直接的な交流がほとんどできなかった1年であった。例年であれば、地域のお年寄りを招いて昔遊び体験を行ったり、ゲストティーチャーを招いてネイチャーゲームを行ったりしていたが、それもできなかった。直接的な交流の中で、その瞬間にしか味わえない感動、言葉のやり取り、気持ちの変化など、リアルタイムに感じることができなかったため、交流としては物足りなさを感じた児童もいたようだった。しかしその中でも、できる範囲でクラス間や6年生の兄弟学級での交流を行ってきた。さらに、外部の幼稚園・保育園に協力を依頼し動画のやり取りを行った。年間計画を立てる際に、どの部分で交流を行うことができるか、具体的な活動を入れることができるのか見通しをもち、具体的な活動や体験の場を設けるなどカリキュラム・マネジメントが重要であると考えます。

2. 動画による評価について

今回、評価の資料として、ワークシートや児童の発言、動画を用いた。動画による評価のしやすさがある半面、完成された発表の場面だけではなく、話し合いの場面から撮影できるようにすると、途中の経過も記録できると考える。そこから、児童の思考の変化や気付きの高まり、変容を見取ることができるのではないかと考える。しかし、教師も全体を指導しながらの撮影となるため、グループを絞っての撮影となる。その時に他の児童の様子を見ること難しいため、例えば、タブレットをグループに1台配付し、継続的に児童自身が撮影し、保存しておくというやり方も考えられる。始めの指導には多少時間がかかるが、タブレットの日常的な利活用にも通じるなど、他教科にも活かせると考える。

V 終わりに

本研究を通して、「具体的な活動や体験をする中で、相手意識や目的意識を明確に示したり見通しをもたせたりすることで気付きの質を高め、自ら「伝えたい」という意欲の向上につながるのではないか。」という仮説のもと、授業実践を行ってきた。気付きの質を高めるためには、以下のことが大切である。

1つ目は、教師が具体的な活動や体験の場の設定をしっかり行い目的意識を示すことで、子どもたちは安心して、自信をもって伝えることができるということである。その安心感や自信が、次への「伝えたい」につながっていく。コロナの状況の中でも、教師が具体的・体験的な場を模索し提示し続けることは、児童の表現の場に繋がっており、さらに表現する相手を明確に示すことで、相手のことを考えた表現方法を児童自身が考えることができるということが分かった。

2つ目は、気付きの質を高めるためには、「振り返り活動」が重要であるということである。ただ「もう一度見てみよう」ではなく、振り返りの視点をもたせ、違いをしっかりと比べ、それを価値づけることが大切である。1年生では、「自分たちの生活に活かす」というところがまだまだ難しいが、「振り返り活動」を積み重ねていくことが成長へ繋がると改めて実感した。

最後に、自分のことだけを考えがちだったクラスの児童が、友達のことを思いやる行動が増えたり、困っている児童に気付き優しく声をかけたりする姿が見られるようになった。一人では気付かないことも、友達と関わることで新たな発見できたり、気付きが生まれたりした。また、今年度、2年生の担任となり、教科担任制を取り入れ、全クラスの生活科の学習を担当することになった。昨年できなかった、直接的な交流も感染症対策をしながら少しずつ取り組んでいる。今後も本研究で得た成果を児童に返していき、課題を見つめ直し、児童の気付きの質を高める授業実践に活かしていきたい。

VI 引用・参考文献

- ・小学校学習指導要領解説 生活編
- ・神奈川県立総合教育センター長期研究報告「気付きの質を高める生活科の授業づくり」
- ・小学校・中学校教育情報誌 「教室の窓」
- ・文部科学省国立教育政策研究所
「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 生活